

特集

# 新生児看護と看護倫理

\* 特集にあたって \*

## 今、新生児看護の現場で問われていること 本質において一致、行動において自由、あらゆることに信頼

生命の誕生はかけがえのない瞬間であり、そこにかかわる医療者の責任は重い。親をはじめ多くの関係者が皆で、生まれてきた子の人生が最善の形で始められるよう全力を尽くします。これまで、本誌では新生児の倫理的課題の一つとしてエンドオブライフケアを取り上げましたが、本特集では、新生児期の危機を乗り越え成長していく子どもと家族のための倫理的課題について取り上げることにしました。ここに本特集の意図を紹介いたします。

### 新生児看護における倫理的課題

「ケアの倫理」は、コンテクスト(言葉、数字など耳から聞こえる、目で見える情報)を重視し、それぞれの倫理問題の独自性・個性・関係性に注意を向け、第三者の見解ではなく、当事者たちの見解を大切にします。

“自己の看護行為は、新生児への不必要な刺激、ストレス、成長阻害因子になっていないか”まずは新生児と親への日常の看護ケアについて立ち止まって再考することを提案します。

“看護師の言動が親の心を傷つけていないか”超早産児や先天性疾患をもって生まれた新生児の親は恐れにとらわれているために、わが子への愛を閉ざしてしまうことがあります。温かい心をもってケアしましょう。

次に、「新生児を迎える家族がもつ困難さ」を取り上げました。例えば超早産児は、救命後も次から次に深刻な課題を経験し、いくつもの合併症を乗り越えなければなりません。また、親においても緊急帝王切開や早産といった予想外の出産を経験した場合、親役割を担う準備ができていません。語れない悲しみを心にしまい込んだまま回復に時間を要します。

さらに「新生児の救命医療と遺伝医療における倫理的課題」を取り上げました。どちらも先端かつハイテクノロジー

であり、医療者主体で進められる危険性を孕んでいます。これらの治療が新生児と親にとって真に有益かどうかを熟慮しなければなりません。看護師はこのような決定に加わり、親と子を擁護する役割を担っています。

### 看護倫理と看護実践；Family-Centered Care

Family-Centered Care 実践として「新生児の安寧と疼痛緩和」と「新生児の最善の医療の決定」の2つを取り上げました。かつては、痛みが伴う子どもの処置場面や治療の意思決定場面に親が参加することはまれでした。しかし親は参加したいのです。看護師は大きく意識を転換させ、親と協働する力を得ていかなければなりません。

### 早産・先天性疾患をもつ子どもを迎える家族への倫理的配慮

本特集では、新生児の特性を早産、先天性心疾患、遺伝子疾患、染色体疾患に分け、小児看護専門看護師、遺伝看護を専門とする看護師、認定遺伝カウンセラーの資格をもつ看護師に倫理的配慮について執筆してもらいました。子ども自身・親・関係者の人生において、もって生まれた特性(個性)は、どのような意味をもつのか。このことに関心をもって寄り添うことこそが倫理的配慮だといえます。

### 組織の取り組み

チームにおける倫理調整は看護師の重要な役割です。新生児と親は、出生前(母親；妊娠期)・出生時(母親；分娩期)・出生後(母親；産褥期)への連続した過程で、固有の体験を積み重ねて成長します。どのような場面においても看護師は高い専門性と柔軟性が求められる、欠かせない存在なのです。

山梨大学大学院総合研究部教授  
中込さと子 Nakagomi Satoko